



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポップカルチャーのファンによる越境的・メディア横断的・次元超越的な移動に関する研究：応援上映に参加する『キンプリ』ファンの実践を事例に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	小新井, 涼
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第16320号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95249
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	KOARAI_Ryo_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：小新井 涼

審査委員	主査 教授	西 川 克 之
	副査 教授	山 村 高 淑
	副査 准教授	岡 田 真 弓

学位論文題名

ポップカルチャーのファンによる 越境的・メディア横断的・次元超越的な移動に関する研究 —応援上映に参加する『キンプリ』ファンの実践を事例に—

本論文は、アニメ映画『KING OF PRISM』シリーズの「応援上映」、すなわち、映画上映中の声援、サイリウムの使用、コスプレ等の行為が許可された特別興行を事例として取り上げ、特にそれに参加するファンの行動に関して越境的・メディア横断的・次元超越的な移動の側面に焦点を当てて分析を加え、複雑化する今日のメディア環境におけるポップカルチャーのファン行動の特質を捉えるための理論的枠組みの構築を試みたものである。日本で製作されたメディアコンテンツのファンを対象に、当該コンテンツをより一層楽しもうとして行うファンの実践の特徴を、コンテンツツーリズム研究やオーディエンス研究で用いられる諸概念を補完的に適用しつつ、ファン研究の観点から把握することを試みている。

本論文の主な学術的貢献は以下のとおりである。まず、国境やメディア、リアルとバーチャルといった様々なボーダーを超え、愛好する対象への応援や消費を行う「推し活」や「応援消費」は、近年、広く社会的・学術的に注目される現象となっているが、本研究はこうした現象を「トランスボーダーなファン実践」と位置づけ、具体的事例の複数国での緻密な調査を通して、その構造と内包される課題について実証的に明らかにした点である。次に、こうした「トランスボーダーなファン実践」を、三種類の「移動」すなわち、第一にメディアを横断する移動、第二に物理的な越境移動、第三にバーチャルとリアルといった次元を超越する移動の複合現象として仮説的に捉え、それぞれ関連する既往の理論的研究を参照しつつ、独自の理論モデルの構築を試みている点は高い新規性を有する。さらに、欧米圏を中心に行われてきたファン研究には議論の偏りがあることを指摘し、そうした既往の研究を批判的に捉えるために、日本と韓国のファン文化とい

う東アジアの事例の対照性を際立たせている点には、建設的な批判的視座が認められる。加えて、当該作品の応援上映については、108 回にわたる参与観察を通して膨大なデータを収集し、実証的に分析した学術論文は本稿が初めてであり、提示された資料は学術的に高い価値を持つものとして評価できる。今後のポップカルチャーのファン行動において、筆者の言うところの 3 つの越境はますます活発化するものと考えられるが、本論文が提示した資料は「応援上映」に関わる最初期の記録として今後の類似研究でも大いに参照され得る有用性、希少性を有している。

一方で、本論文には以下のようないくつかの課題や限界が認められる。まず、用いられていくいくつかの重要な概念、たとえば応援上映における「過渡的空間」、現実と物語を「行き来」する、あるいは作品に「没入」する、同じ趣味趣向を持ったファンの「連なり」などの外延的意味が曖昧であるとの印象が避けられない。また、扱われる日本と韓国のファン行動の間に生じるコンフリクトの要因分析については、より緻密なインタビュー調査に基づいて多面的に試みられるべきではなかったか。さらに、対象事例が目新しく興味深いものであることは十分理解できるが、類似する他の事例と比べ何が共通しており何が異なっているのか、類似事例の整理と事例選択の妥当性に関する議論がもっとあってしかるべきではなかったか。アニメ映画の応援上映という極めて現代的な事象が成立するに至るまでの、メディア史・社会文化史的アプローチからの説明が不足しているのではないか。具体的には魔法少女アニメ、映画作品、歌舞伎鑑賞、アイドルファンの「追っかけ」など、本論文で扱う事例と類似性を有した事象をメディア史の視点から整理した上で比較、分析することによって、当該事例の特質がより明らかになるとともに、本論文で得られた知見をより一般化することが可能になったのではないかと惜しまれる。

しかしながら、本論文で提示された「トランスボーダーなファン実践」という分析の枠組みは極めて独自性の高い理論モデルであると同時に、ほかの事例への応用の可能性を十分に有している。また、上述のとおり、綿密丁寧な調査によって得られたデータは、既往研究にはない新規性を持つものであり、その意味において、ファン研究やコンテンツツーリズムなどの関連する研究分野において本論文がなした貢献は大なるものがある。

こうして本論文は、関連する先行研究を参照して適切な理論モデルを構築したうえで、フィールドへの参与を含めた丹念な調査によって収集した豊富な一次資料に基づき、極めて現代的なメディア環境、コミュニケーション環境の下で生じた事象に対して斬新な分析を試みており、論理的な説得性および時宜的価値を備えた学術的貢献を果たしていると評価される。したがって、本論文は博士学位論文に求められる水準を十分に満たしており、審査委員会は博士（観光学）学位の授与に値するものとして、本論文を合格と判断した。